

動物行動の研究から(2)

イルカとの出会い

柴坂 寿子

(お茶の水女子大学)

則竹 詳子

(関水中造形センター)

リュック・ベッソン監督の映画、『グラン・ブルー』(一九八八年制作)をご覧になったことがあるだろうか？ 素潜りの限界に挑む二人の男の生きざまと友情を描いたこの映画の中で、イルカは「人間が究極的に求めるなにかに向かって、人間を導く存在」として象徴的に描かれている。

人間と動物の関係の歴史の中で、動物は文化によりまた時代により人間から様々な扱いを受けてきた。「動物は人間より劣っているものであり、人間が利用

する対象である」とする長かった人間至上主義ともいえる流れに対し、その見直しの動きが少しずつ出始めている。

それはベッソン監督のような芸術家からだけでなく、科学者たちからの動きでもある。例えば、心理学者、精神医学者、行動学者、獣医師などを中心とした「人と動物の絆の研究グループ」は、動物との交流が人間のパーソナリティの発達に及ぼす効果や、コンパニオン・アニマルが自閉症や精神病の共同治療者とし

て機能する事例を、数多く発表している。

こうした見直しがなされるようになった基盤には、人間が動物達に触れたときに「動物は人間より劣っているもの、人間が利用する対象」という考えに当てはまらない何かを、人間が共通に体験するからではないだろうか。自然の中で動物たちに触れる機会を多くもつダイバーたちへの調査をもとに、特にイルカと出会ったとき、人間が何を感じ、どの様な影響を受けるのかを考えてみたい。

イルカと出会ったとき、イルカの種類や状況に応じて、ダイバーのとりうるふたつのふれ合いのパターンがある。ひとつは、ボートの上などからイルカの行動を見て楽しむ場合で、ここでは「イルカウォッチング」と呼んでおく。もうひとつは、マスク、スノーケル、フィンなどスキング用の道具を装着し、海に入ってイルカと一緒に泳いで楽しむ場合で、ここでは「ドルフィンスイム」と呼んでおく。

ハシナガイルカ類は水面上では華麗なジャンプを見せてくれるが、水中でははにかみやで人間とは遊んでくれない。それでハシナガイルカ類に出会ったときにはイルカウォッチングになる。またバンドウイルカ類に出会ったとき、普通はドルフィンスイムが可能だが、子連れの時や移動中の時には神経質になっているので、イルカウォッチングとなる。

調査は三つの部分から構成されている。第一はダイバーに対するアンケート調査で、これが主要な資料である。筆者のひとり（則竹）の所属するスクールダイビングサークルのメンバーを中心に、三十七名のダイバー（男性二十名、女性十七名）から回答を得た。年齢は十八〜三十八歳の間である。主な質問は、イルカと出会ったときの第一声は何だったか、そのときどのような行動を取り、またどの様な感想を持ったか、イルカの印象はどのようなもので、どんなところからそう思ったのか、イルカと出会ったあと自分にとってどのような変化が現れたか、イルカと出会うことはどのような体

験で他のどのようなことに相当するか、などである。

質問にはイルカウオッチングの場合と、ドルフィンスイムの場合に分けて、それぞれ答えていただいた。

第二は、ダイバーの行動の観察である。小笠原において前述のダイビングサークルのメンバーがイルカと実際に出会った際、第一声は何か、どのような行動を取るのか、表情はどうか、どのような感想を述べるかなどをポイントに観察した。そのとき観察対象者の人数は二十八名（男性十六名、女性十二名）、年齢は十八～二十四歳であった。

第三は、小笠原でダイビング、イルカウオッチング、ドルフィンスイム、ホエールウオッチングなどのガイドをしている方達二名へのインタビューである。ガイドの方は二名とも五十歳代の男性である。質問はダイバーにアンケート調査した項目に準じた。

これら三つの資料をまとめ、イルカウオッチングとドルフィンスイムを比較した。結果の概略を示したものが次頁の表1である。

イルカウオッチングとドルフィンスイムとは様々な相違があることが結果から示唆される。

第一の相違と考えられるのは、イルカが人間にとってもつ役割である。先行研究から、コンパニオン・アニマルなどの動物が人間にとってもつ役割は、①個人的な伴侶、②エンターテイナー、③マスコット、④生き物環境、の四つに大別されるといわれている。

イルカウオッチングでのイルカの役割とはどれに当たるのだろうか。表1に示されているように、イルカウオッチングでは、イルカにであったときの第一声は「イルカだ」、「あつ」というように、目の前に起こっているそのままを声に出していることが多い(①)。そしてボートの上で、大騒ぎをしながら(②)、大喜びして楽しんで(④)。観察を例にあげれば、イルカがボートのすぐ横や真下を通ると「きゃー!」「わーっ!」という大歓声が上がっていた。イルカがジャンプしたり、ボートの引き波にのってサーフィンをするかのように遊んでいると拍手が起こったり、歓

表1 イルカウォッチングとドルフィンスイムの比較

項目	イルカウォッチング	ドルフィンスイム
①イルカとの遭遇時の第一声	目の前に起こっているそのまま （「イルカだ！」）	無言（言葉にできない感動） よびかけ（「遊ぼうよ！」） 話かけ（「ピーピー」）
②イルカとの遭遇時の行動	ボートの上で見る 大騒ぎする	追いかける 近寄る 一緒に遊ぶ 遊ぼうとする
③遭遇体験後の感想	抽象的（「すごい！」）	具体的（「イルカがここまで近寄ってくれた」）
④遭遇体験後の表情	大喜び 楽しんだ	笑顔 穏やか 満足感 達成感
⑤イルカの印象	かわいい	かわいい、人間に好意的 人間に近い、自分に近い
⑥イルカの印象の理由	イルカの行動 （ジャンプする姿など）	イルカの表情（特に目） 意思
⑦遭遇体験後の変化	特になし	イルカを人間と一緒に何かできる ものと感じるようになった
⑧遭遇体験の記述	感動する （「ドキドキするもの」）	感動する 人の心に働きかけ、安らぎを生む （「心が洗われる」）
⑨遭遇体験に相当する体験	感動的な体験（「虹を見る」 「感動的な映画」）	大切な人との体験（「自分を待っていてくれた人と会う」）

声が一段と高くなったりしていた。イルカを見た後のイルカの印象は、ジャンプする姿などを理由に、「かわいい」「遊び好き」などと捉えられている(⑤、⑥)。

こうしてみると、イルカウォッチングは、ダイバーからみて、水族館でのイルカのショーが自然の姿で自分の前に出現した様な感じなのではないだろうか。ダイバー達の行動からみても、ボートからイルカを見ているため、一歩離れたところから観客として一方的に鑑賞し、拍手を送っているという感じがある。イルカウォッチングではイルカは人間にとってエンターティナーとしての役割を持っているのではないだろうか。第二の相違と考えられるのは、イルカとの出会いの体験が人間に引き起こすものである。イルカウォッチングは感動的な体験ではあるが(⑧、⑨)、その後、人間に何か変化をもたらすものではない(⑦)。まして人格形成や人生の大転換というような変化はもたらしていないようだ。

これはイルカウォッチングでイルカのもつ「エンターティナー」としての役割から、当然のことなのかもしれない。ショーやロックコンサートなどでも、例えそれが感動的で楽しいものであっても、多くは人生観や人間性を変えるようなものではないのではないかと。これと同じように、イルカウォッチングではイルカの動きを見て感動し、楽しくなるもの、そうした体験は一過性のものである。

ではドルフィンスイムではどうだろうか。まず第一のイルカの役割について考えてみよう。イルカに出会ったときの第一声は、感動の余り声にならないという場合が一番多いものの、「遊ぼうよ」と呼びかけたり、「ピーピー」と話しかけたりしていることも多い(①)。またダイバーはイルカの後を追ひ、一緒に遊んだり、遊んでもらおうとしたりする(②)。イルカと積極的に交わろうとする人間の姿がそこに見えてくる。ドルフィンスイムに相当する体験としては、「恋人、愛する人、気の合う友達などと過ごすこと」「自

分を待っていてくれた人に会うこと」など、自分にとって大切な人との体験があげられることが多かった(⑨)。そして実際はイルカはどの人とも遊んでいるようなのだが、それぞれのダイバーは「自分にだけイルカが寄ってきてくれた、遊んでくれた」と認識していることが多いようだった。

こうした結果から考えると、ドルフィンスイムでのイルカの役割は「個人的な伴侶」にあたるのではないだろうか。ドルフィンスイムでは、イルカは人間と



ずっといっしょに生活して伴侶関係を持っているわけではない。また人間は繰り返し同じ個体に会っているわけでもない。ここは家庭で飼われているコンパニオン・アニマルが人間と持つ個人的な伴侶関係とは大きく異なる。しかしドルフィンスイムで人間が感じ取っているものを見ると、イルカは人間に必要な人間関係の体験の代わりになったり、伴侶関係で味わうような体験を提供したりしているように思える。

第二に、ドルフィンスイムが人間に引き起こすものはどうだろうか。ドルフィンスイムは「心が洗われる」「純粋によい気分になる」「優しい気持ちになる」「大都市での生活を忘れて、無邪気な気持ちになれる」「心を和ませてくれる」など、心に働きかけ、安らぎを与えてくれる体験のようだ(⑧)。

この安らぎの効果はどの様にして生まれるのだろうか。ドルフィンスイムをするときにはダイバーはイルカの印象を目から受けていることが多く(⑥)、イルカに呼びかけたり話しかけたりする(①)。そしてイ

ルカとの交流を期待し(②)、笑顔や穏やかな表情を見せる(④)。これらの行動は、一般に親密な関係を持った対象に向けられる行動である。

さらにドルフィンスイムでは、ダイバーは、イルカはかわいいただけではなく、人間に近く、好意的なものという印象を受け(⑤)、表情や意思があるという認識を持っている(⑥)。そしてドルフィンスイム後には、イルカを人間と一緒に何かができるものと考えようになっている(⑦)。こうしたことから、イルカに人間との類似性を感じている様子が窺える。

哺乳動物の鳴き声、しぐさの基本的な部分は、種を超えて共通するものがある。それゆえに人間がイルカに意思や感情を感じ取ること、そこからイルカを自分に近いもの、理解できるものとして捉えることは、ある種当然のことかもしれない。

またひとりのガイドの方は「いまなお維持されているイルカの絆を大切にしたい関係に触れ、本来あるべき生き物の姿を見た」と話し、あるダイバーは「誰に対

しても変わらぬ接し方をするイルカに忠実さを感じ、忘れかけていたものを取り戻した」と語っていた。ここからは、人間はイルカの変わらぬ姿、不変性を感じ取っているのだろうと考えられる。

ドルフィンスイムで人間はイルカに親密な感情を持ち、イルカに人間との類似性を感じ、人間に比べて変わりにくいイルカの生のあり方に気づく。人間がイルカと泳いで安らぎを得るのには、このような認識が基盤になっているのかもしれない。

結果を通じて述べてきたような、イルカウオッチングとドルフィンスイムの違いはいったい何を示しているのだろうか。それは人間が動物との関わりの中で得るものは、関わりの対象となる動物へのアプローチの仕方、認識の仕方によって大きく変わってくるということではないだろうか。

ボートに乗り、イルカから距離を置き、眺めると、イルカは人間を楽しませてくれるエンターテイ

ナーである。人間は大喜びはするものの、その感動は過ぎ去っていくものようである。これに対してイルカの住む海の中に自分も入って行き、イルカと同じように海に身を委ね、水という媒体を通してイルカを肌で感じる時、そして間近でイルカと目を合わせ、その感情や意思を読み取り、一緒に泳ぐとき、イルカは自分と対等で、大切な個人的存在となる。こうした体験は人間の心に安らぎを与え、深く心に残っていくようである。

イルカが人にもたらすものについてここまで語ってきた。今後こうした効果を求めて、人間と動物の交流がもっと意識的に行われるようになるかもしれない。しかし、動物との交流のもたらす人間への効果を最大限に引き出すことに躍起になっていくことは、「動物は人間より劣ったもの、人間のために利用するもの」という考えへ逆戻りすることになりかねないのではないか。本来こうした考えのもとでは、動物と人間との

本当の交流もその効果もありえないはずだ。

私達が動物達との交流の中で真に求めているのは、部分的に取り出された効果ではなく、動物達が彼らの本来の環境で生き生きと生きる姿そのものであり、私達もまた一個の生物として彼らとその場で生の喜びを共有し、交換していく体験自体なのではないだろうか。

参考文献

キャッチャー・A・H、ベック・A・M 『コンパニオン・アニマル』 東京 誠信書房 一九九四

則竹詳子 「自然と動物が人間に及ぼす効果―ダイバーへの調査から―」 平成六年度お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科卒業論文 一九九四